

破丘の上に立てる友を思ふに、堪へ難い涙のあふるるのであらう。兩の眼より落つる涙の糸を手に拭ふて、どんよとした冬雲を眺めて居る。

「目入るまで」

渠も又この言葉を忘るゝ事が出来ぬのである。

(二月三日稿)

旋

風

無

憂

「た静さん何處か悪いの？」

敷居越に聲を掛けたのは、二十二、三、色の白い、肥満した、目とか、鼻とか、一つ一つは揃つて居るが、何となく緊のあい顔の女だ。

「あゝ！」室の中からは、如何にも五月蠅と云つた様を返事が洩れた。

「そう、ちや裕然寝てるが好い。なんから醫者を呼んでも好いが」

と云つて見たが返事が無いので、障子を締めて、二歩、三歩、歩いて「例の達は」と口の中で云つて忙しそくに段階子を下りた。足音に、主人だらう帳場から圓い、肥つた顔を上げて、

「た静はまだ寝てるのかい」と聞いた。

「ハイ、何處か悪いつて！」

段梯子を下りた處で、立ち止つて答へた。

「平常のだらう、投つてわくが好い」^{いづい}と些程氣にも掛けぬ風で、月末の調だらう、一心に又帳面を繰り初めた。女は無言で奥へ這人つた。

れ静と云ふのは、今年廿五で、緊つたと云ふよりは、寧權のあると云ふ程の顔をのだが、その不思議な位飛び放れた、清い、情の籠つた目がよくその權のある顔を和けて、スラリとした、何處か品の好い格恰と共に、凄く男を魅する。

れ静は名古屋の町放れに生れたのだが、親父はマア無頼漢^{ころつき}で、五才の時に母に生き別れてから、親父から育てられたと云ふよりは、自育つたと云ふのが至當で、十六の時に已に家を飛び出してから、これ迄半生の歴史は随分、復雜を極めて、マア大抵の浮世の悲惨な所を見ましたし、自分であめても來たのだ。そして今は、郷里に近い岐阜で、此の牛肉屋でもあり、洋食店でもある家に女中をして居るのだ。

れ静は一体、浮いた氣質で、これ迄大抵の困しい、悲しい事は笑つて平氣で通つて來たのである、母親はモト二十年も昔に別れて顔も覺て居らぬし、時々逢つて見たいと云ふ氣が、偶然^{ふさ}、起らぬでもないが、そんな事はごくごく稀なので、マア忘れてしまつて居るのだ。父は迷惑こそ掛けられ情愛もど云ふものは露程も無い様なので、れ静は逢へば好いことはあいと勉めて遠つて居るのだ、で、れ静は、眞實^{ほんじつ}に此の世の中に一人きりなので、モロどうなとなれど、捨鉢にあつて、その日くを入り變る客を相手にして、有那無那に笑つて暮して居て、行末も殆ど考へた事は無いのだ、然れ静には妙な癖があつて、度々では無いが時々、ヒョイ／＼と起るので、その癖と云ふのは、この

癖が起ると、何をするのも嫌になつて、人と話をするのは勿論、飯を食ふのさへ五月蠅氣がして、只十日をあし、夜とあり、無言つて一人で寢て居るのだ。そして此の一人で寢て居るのもた静には随分、勞いのだが、外に仕方が無いから寢て居るので、寢て居る中には、母のことが思ひ出されて逢ひたくて、耐まらなんだり、怖しい、嫌なと思つて居る父の事さへも氣遣はれて、逢つて見たい氣もし、母と父と自分と、三人が一諸に暮したらどんなに樂しからうあど、柄にも無い事も思つて見るのである、殊に袴々と胸に迫つて耐えられぬのは、自分はいんち事をして、その日、その日を送つて居るが年がよつて腰が屈がる様にあつたらどうあるだらう、自分は世の中にたつた一人あのだ、年かよつたら誰が世話して呉れ様あど、切に思ふのだ、すると、年がよつてヨボ／＼と屈つた腰で、ボロ／＼の着物を着て縁日あどに狼狽して居る自分の姿が目の前に確然と見れたり、重い病氣で、困つて寢て居ても誰一人水一杯も汲んで呉れるものもない憐れな自分の姿が目映つて、モ／＼耐えられぬで、蒲團の中に頭を突つ込んで只々泣くのである。

然／＼かうした風の續くのはそう長くは無いので、大抵一日か、二日で、三日と續くのは稀なのだ。一日か、二日か経てば、まるで夢から醒めた様に、ケロリとしてそんな事があつたかと云ふ風に、全く人の事でもあつたかの様、この癖の時期が終ると、後は反つて平常よりも陽氣で浮々して、することがすべて生々しく、客あどにも一段と愛想よく接するのだ。誰も初めはどうしたのかと非常に心配するが馴れると誰も平氣なもので「又例のが起つた」、位で投つて置くのだ、

今日もた静はそれを起したので、朋輩のた清も例のだと別にかまいもせぬし、主人も又例のかと投

つてわくの蓋、

實際に靜は、此の家には大切な女中なので、た靜の爲に此の家も余程繁昌するので、主人も大抵お無理は許して、此の癖もそう度々ではなく、月一度位それも起らぬ月も多いのだから、まあ大目に見て居るのだ、

た靜は今日も例の様に、晝飯も食はず、夕飯も一杯程食つたのみで、夜になつて、皆忙しうに働いて居ても起き様もしなかつた。

(二)

今女中の送り出した三人の客の出て行くのを、帳場から女將が、

「毎度大きに有り難うー」と尻上りの肝高い聲を掛けると、肉を切つて居つた男衆が一勢に首を上げて「毎度大きに有り難うー」

と機械的に尻上りの聲を掛けた、それと同時に、店へ飛び込んだ、御客がある、年の頃二十八、九の下豊の罪の無さそうな男である。何處かの歸りと見えてインバネスに中折を冠り、手に土産らしいものを下げて居る、女將を見ると「寒いねー」と聲をかけた。女將は狼狽した顔で、「これは篠田さん、何處かへ御出で、ほんとうに久し振りで御座いますかアー」と愛嬌を諷いた、篠田さんと云はれた男は、笑ひながら

「一寸名古屋迄」と答へて、「空いてますか」と聞いた、女將は「ハイ」と答へて、「御案内！」と例の

肝高い聲を上げた。すると二階から今朝の女中が下りて来て、インバネスの男を見ると、

「マア―篠田さん、ほんに久し振り、私は澤山／＼話があるは」と、ニコ／＼して居る篠田を引つ張り上げた、篠田は中學時代からの馴染みでよく此の家を知つて居るのだ。女中はほんにあまり御見限はひどいとか、奥様が可愛いんでしようとか、饒舌^{じやう}りながら、四疊半の部室へ案内した。そして、「御飯?」と聞いて、男が黙頭くと、食卓を出しつゝ

「何處へ御出あさつたの?」と聞いた、男が

「名古屋へ」と答へると又、

「何時!」と聞いた。

「一昨日の一番で。」と男が答へると、

「奥様がさぞ淋しかつたでしやう」と又笑ひながら云ふ、男は只ニコ／＼と笑つて居る。食卓を据ゐて、火を入れると、

「御酒もあがるんでしやう」と、承知して居る様に聞いた。男が無言つて黙頭くと、下へ降りて行つた。暫くすると、肉と酒を持つて上つて來た。

女中は酒を一杯酌^{しやく}いで於いて、肉を燒きにかゝつた。そして名古屋の事を聞いたり、自分が話したりした。男は空腹なので三本計飲むと、ポツト頬が赤くなつた。で男は飯をと注文した、女は降りて行つた。暫くすると、飯の代と、肉の代を持つて上つて來た。男は思ひ出した様に、

「あゝ、お清さん、今日はお静さんが顔を出さぬが如何うなの!」と聞いた。

女は男の側から敷島を抜き出して、遠慮なく火を付けて居たが、ツト頭を上げて、鼻からスーッと煙を吹いて仰山らしく目を見張つて。

「例の病氣」も答へた。男は、「例のか」と云つて、

「御見舞に行つてやうか」と云ふと、女は

「駄目よ！御見舞に行つたつて御返事なから」と、流石に不平らしい様子を現した。

「然し、山下の傳言でも話したら治るかも知れんよ」と男が云ふと、

「そうすりやア！ほんどうに治るかも知れんは」と眞面目な顔をして今度は賛成した。

飯を食ひ終ると、篠田は立つて六疊の部室へ行つた。室の前へ來ると「這入つても好いかい」と聞いたが、返事があいので障子を開けて室に這入るとた静が青い顔をして天井を眺めて居る、篠田は枕下へ行つて、

「た静さん何處が悪いのかい、馬鹿に元氣がよい顔してるぢやないか」と元氣よく聲を掛けた。

「有り難う」と、

た静は答へたが、如何にも嫌そうな調子であつた。篠田は勉めて元氣な顔をして。

「折角、久し振りで來たのに、た静さんが寝て居るのではんに劣らなかつた。あゝそう云へば、山下が近い中に行かう」と云つてたから」……と云つて相手の顔を見たが不相變苦い顔をして天井

を眺めて居るのでこりやア！駄目だと思つたが、態と元氣よく、

「明日頃一諸にた静さんの見舞に來ようよ」と云つて見たが、女がヒコツともせぬのでスツカリ駄目

だどあきらめて「大切にするが好い」と云つて部室を出てしまつた。

自分の室へ歸ると、所在^{しこころ}あさそうに座つて居た清が「どうだつたの」と聞いた。

「駄目だ」と云つて、彼れは火鉢の側へ座つて「御返事なしさ」と云つて、ハッハッハと笑つた。そして思出した様にインパネスを引きよせた。た清は驚いたと云ふ顔をして

「モ―歸るの？」と目を上げた。

男は「ウシ」と首をふつて、「今日は途中だから、早く歸らなくつちやアー」とインパネスを着た。

「矢の張奥様の勢^{せい}だわ」と云つて「先日も女將さんともた評判したことですが、ほんとに長尻だつた、貴方が、此の頃は火の付く様にた急ぎあさるのも、皆奥様の勢^{せい}だわ。奥様の勢力^{もくろ}つてほんとに怖しいのね」と一寸睨む真似をした。

篠田は笑ひながら、

「奥様によろしく云つてわくよ、今度來る時は、屹度奥様からこれを三河亭のた清さんに、なんて御土産^{ごみやげ}を傳言^{でんごん}かるよ」。

「あら憎らしい」とた清は軽く篠田の背を打つ真似をして、そして中折を取つて渡した。

篠田は下へ降りると、女將さんに「勘定は又一諸に」と云つて女將が「た次手でよろしゅう御座いますと一寸頭を下げる」とた静さんをた大切にと笑ひながら云つて、同じ様に、

「毎度大きに……」と云ふ聲に送られて歸つて行つた。た静は遂々此の夜起きなかつた。

(三)

翌朝にあると、八時頃静は起きて来た。そして朝飯を食ふと湯へ行くと云つて出て行つた。
 清も、女將も、主人も、治つたかと思つた。

晝少し前に静は湯から歸つた。髪も結び直して、羨しい程黒い毛が一本も亂れずに屹と島田に結ばれ、少し衰へた顔が湯上りでポット上氣して一入美しさを添へて居る。見るからに如何にも元氣よく、これが昨日、一日六疊に、飯も食はず、物も云はずに寝て居た静とは如何しても思はれぬ。
 静も亦昨日の事は夢にも見えかつた様に活々と元氣よく働いて、夜にあると生れ變つた様に愛想よく客に接して居た。殊に十時頃、昨夜の篠田が中學時代からの親友で静が夙うから岡惚れて居る山下を引つ張つて來てからあどは、一諸になつて面白そうに清と共に騒いで、兩人が歸る時あどは静は宵からのチビ／＼飲んだ酒が廻つて顔を赤く染めて居た。

獨吟床

森田 絢愿

朧けふれる人室おぼろ ひとむろ。

床の沈黙や、花盞眠り。しじま はながめ
 夢小舟、燈輝かよけて。ゆめおがね とうき

夜の黒瀬漕ぎて下れば。くろせ
 苟且の眼まじろぎ、ふと湧きぬ。からそめ め
 消ぬる幻、戀の優芽。けふろし れん の ことば

寢息むるゝ、肉の弛緩。ねいき しろう たふみ